2020年度 環びわ湖大学·地域コンソーシアム 学生支援事業

つながるしが、
つなげるワタシ

SHIGA SDGs Studios Booklet 2020

大学生が見つけた滋賀のSDGs

一般社団法人 環びわ湖大学·地域コンソーシアム

SHIGA SDGs Studios とは

「SHIGA SDGs Studios」は、環びわ湖大学・地域コンソーシアムに加盟する大学の学生が、滋賀県内の自治体を中心としたSDGsの実践者、企業やNPOの方にインタビューを行い、SDGsの観点から学生自ら記事を執筆。最終成果を本冊子やメディア、Web、動画で発信します。大学や学部・学年の異なるチームメンバーとともに、SDGsに代表される社会課題を知り、発信する楽しさを体験できる、スタディープログラムです。

CONTENTS

What is SDGs? 04

一般社団法人 環びわ湖大学・地域コンソーシアムとは 06

SHIGA SDGs Studios での取り組み 07

大学生が見つけた滋賀の SDGs 09

team1 | 「コンドマスター」が滋賀にいた 10
team2 | こどもソーシャルワークセンター 12
team3 | たねや・クラブハリエ 自然の恵みから美味しいお菓子を 14
team4 | 彦根「みんなの食堂」 16
team5 | 滋賀県立びわ湖フローティングスクール 18
team6 | 農業から始まるSDGs「共生社会」を目指す滋賀県 20
team7 | 木質廃棄物を有効活用しCO2の削減を 22
team8 | 昼TRY部の考える教育と自己理解 24
team9 | 福祉の形 理想を追い求め模索 26
team10 | 共生社会への第一歩 滋賀の「農福連携」とは 28
team11 | SDGsとビジネスをつなぐ しがハブの挑戦 30

環びわ湖・大学 SDGs マップ 2020 32

Message 34

What is SDGs? SDGsとは

SDGs（持続可能な開発目標:Sustainable Development Goals）とは、環境や貧困といった人類共通の課題解決に向けた、2030年までに持続可能でよりよい世界を目指す国際目標です。

これは「我々の世界を変革する：持続可能な開発のための2030アジェンダ」の具体的な行動指針であり、地球上の「誰一人取り残さない」をスローガンとして、2015年9月の国連サミットで全会一致で採択されました。

SDGsをもっとよく知る>>
国際連合広報センター（日本語ページ）
https://www.unic.or.jp/

滋賀県のSDGsの取り組み>>
SDGsの普及および実践に係る滋賀の取組
https://www.pref.shiga.lg.jp/kensei/gaiyou/sdgs/

SDGsは17のゴールと169のターゲットから構成されています。それぞれ貧困や格差をなくすことと、将来の世代も限りある資源を活用できるように開発を進めることを目指した、全世界が取り組むべき目標です。よって、先進国も発展途上国も国際的に連携して、2030年までの目標達成に向け努力しなければなりません。

SDGsは、2030年までの社会課題解決のゴールです。もし今あなたが18歳であれば、2030年には28歳。つまり、SDGsが目指す2030年では、今の若者が社会の中心を担う世代となります。私たちは、SDGsを解決するために、解決を担える人材の育成が必要不可欠だと考えています。

滋賀県とSDGs

2017年1月、滋賀県は全国に先駆け、SDGsを県政に取り込むことを宣言しました。

2019年には滋賀県が、2020年には湖南市がSDGsの達成に向け優れた取組を進める「SDGs未来都市」（内閣府）に選定されました。

滋賀県は、琵琶湖を健全な姿で次世代に引き継ぐため、琵琶湖の環境にやさしい石けんを使う「石けん運動」を行うなど、官民挙げて環境保全に熱心に取り組んできた地域です。また、中世以降全国で活躍した近江商人の「三方よし（売り手よし、買い手よし、世間よし）」の精神や、戦後日本の「障害福祉の父」と呼ばれる糸賀一雄氏の「この子らを世の光に」という思想を受け継ぎ、実践してきた土地でもあります。こうした、滋賀県に息づく、経済・社会・環境の調和につながる考え方は、SDGsの精神と合致するものです。

滋賀県は、県の政策にSDGsの視点を活用するとともに、経済界、大学等多様なステークホルダーとのパートナーシップを拡大しており、県内では、SDGsの達成に向けた様々な取組や新たな連携が次々と生まれています。

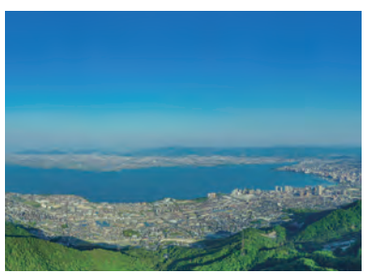
SDGs未来都市　滋賀県
「世界から選ばれる『三方よし・未来よし』の滋賀の実現」

近江商人の「三方よし」の精神

近江商人の経営哲学のひとつで「売り手よし、買い手よし、世間よし」を示す表現。自らの利益のみを追求することをよしとせず、社会の幸せを願う精神がSDGsに通じている。

石けん運動

1970年代、琵琶湖に淡水赤潮が発生。住民自らの手で琵琶湖を守るため「合成洗剤をやめ、粉石けんを使おう」という県民運動が展開された。



琵琶湖

多様で豊かな生態系や歴史・文化を育み、近畿圏約1,450万人の生活と産業を支える国民的資産。治水機能、観光資源など様々な役割を担っている。

一般社団法人

環びわ湖大学・地域コンソーシアムとは

びわ湖を取り巻く大学と自治体・経済団体が連携して共に活動しています。

滋賀県内には14の大学・短期大学があり、およそ35,000人の学生が学んでいます。本コンソーシアムは、大学・短期大学、自治体、経済団体、地域の連携を基盤にして、会員同士が相互に連携・協働し、地域社会の発展と魅力ある大学づくりを目指して活動をしています。

大学地域連携課題解決支援事業、学生支援事業、就職支援事業、単位互換事業の4つの事業により、県内大学、学生と企業、NPOなどの非営利法人や地域住民の方々とより連携を深めるため、多種多様な地域連携事業を展開しています。

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS

環びわコンソーシアムは 持続可能な開発目標(SDGs)を支援しています

2015年9月の国連サミットで採択された持続可能な開発目標(SDGs)の趣旨に賛同し、滋賀県における普及推進に向けて、各大学等で取り組む学生活動について情報共有するとともに、県内の大学等や学生が連携した取り組みを行います。

加盟大学・短期大学

滋賀大学
滋賀医科大学
滋賀県立大学
龍谷大学(瀬田キャンパス)
立命館大学(びわこ・くさつキャンパス)
成安造形大学
聖泉大学
長浜バイオ大学
びわこ成蹊スポーツ大学
びわこ学院大学・びわこ学院大学短期大学部
びわこリハビリテーション専門職大学
滋賀文教短期大学
滋賀短期大学
放送大学(滋賀学習センター)

加盟自治体・経済団体

滋賀県
大津市
彦根市
長浜市
草津市
甲賀市
東近江市
滋賀経済同友会

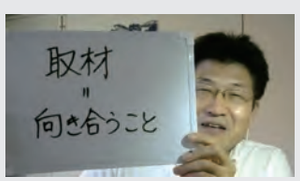
SHIGA SDGs Studios

「SHIGA SDGs Studios」では、環びわ湖大学・地域コンソーシアムに加入する自治体を中心とした実践者、滋賀県を中心に様々な活動に取り組む企業やNPOの方に参加学生がインタビューを行い、SDGsの観点から記事を執筆。最終成果を冊子やメディア、Web、動画で発信します。大学や学部・学年の異なるチームメンバーとともに社会課題を知ることや取り組みを発信する楽しさを体験できるプログラムです。今年度は新型コロナウイルス感染症対策として、全プログラムをオンラインで行いました。

社会課題を知って、取り組みを発信！

記事作成

SDGsレクチャーや取材・記事作成講座を通して、必要な知識や心構えを身につけ、世の中に発信する記事を作成します。記事の執筆にあたっては、朝日新聞社講師や事務局スタッフによる添削や執筆サポートを行いました。



SDGsレクチャー・取材記事作成講座の様子。レクチャーはすべてオンラインで行いました。

SDGsレクチャー講師

学校法人立命館
立命館 SDGs 推進本部
イノベーション・オーガナイザー
上田 隼也 氏

立命館大学卒。インパクトラボ代表理事。学生時代からSDGs に実践的に取り組み、立命館大学で日本初の学生主体のSDGsイベント·Suatainable Weekを立ち上げる。現在は立命館 SDGs 推進本部でイノベーション・オーガナイザーを務めながら、教育現場でも実践に取り組む。

記事・取材講座 講師

株式会社朝日新聞社
外園 周二 氏

1989 年朝日新聞社入社。高知・京葉総局記者、東京・福岡・名古屋・大阪の各本社で編集記者や次長(デスク)。広報部次長、高知総局長、編集局教育ディレクターを経て、大阪本社代表室主査(教育総合本部)。立命館大学教養ゼミナール「SDGs 表現論」でも特別講師を担当。

取材活動

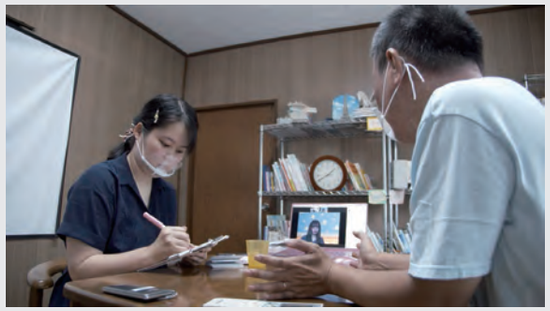
SDGs･取材についてのレクチャーを受け、異なる大学の学生でチームを編成。滋賀県内の自治体で様々な活動を行う実践者にインタビューを行いました。

発信スキル講座 講師

一般社団法人 SDGs Impact Laboratory

吉武 莞 氏

立命館大学情報理工学部。クリエイティブディレクター。高校から学生新聞に携わり、高校・大学を通じて記者・編集者として活動。イベント企画・運営や広報担当など、ディレクター・デザイナーとして活動し、グラフィックデザインを専門として様々な活動を行う。



取材の様子。オンラインを基本として取材を行い、SDGsの実践者に話を聞きました。

発　信

記事を作成した後、成果物や取り組みを冊子やWeb、動画などを通じて発信します。学生同士の記事発表会や高校生へのSDGsの発信、県内のSDGsに関連するイベントに参加し、ポスターセッションや意見交換を行います。多種多様な専門家や地域の方からフィードバックを頂きます。

10.5 - 10.10

立命館大学

Sustainable Week 2020

立命館大学で2017年にスタートした、日本初・学生主催のSDGs体験型イベントです。「Imagine the Future」をテーマにオンラインで視聴・参加できるLIVEイベントやワークショップなど様々な企画で、学生の視点からSDGsやこれからの社会について考えます。

10.5 MON 15:30-16:30 | つながるしが、つなげるワタシ。SHIGA SDGs Studios 成果報告会

参加学生が滋賀県知事の三日月大造氏と「滋賀のミライ」についてオンラインで対談を行いました。

YouTubeで視聴する▶
youtu.be/56aVUzJnCs0

（左上）学生同士の記事発表会での発表の様子
（右上）Suatainable Week 2020でオンライン登壇する三日月大造滋賀県知事
（左下）YouTube配信した成果報告会の様子

11.21 SAT

滋賀県立大学

第3回 キャンパスSDGsびわ湖大会

滋賀県立大学で行われる、県内外の学生等がSDGsの達成に関連する活動を持ち寄り、対話し、交流を深め、新たな試みにつなげるための集いです。SDGs実践家による基調講演や、滋賀県知事と学生との対談企画、小学生から高校生、大学生の活動報告など様々なイベントを予定しています。

10:00-17:00
オンライン開催

滋賀県立大学公式サイト▶
https://www.usp.ac.jp/

大学生が見つけた 滋賀のSDGs

大学や学部・学年の異なるチームメンバーで構成された参加学生が、滋賀県を中心に様々な活動に取り組む企業やNPOの方にインタビュー。SDGsの観点から記事を執筆しました。

team1	心のままに生きることこそが「性」「コンドマスター」が滋賀にいた 清水美春さん（滋賀県高校教諭）	10
team2	子どもたちに「居場所」を与える　こどもソーシャルワークセンター NPO法人 こどもソーシャルワークセンター 代表 幸重忠孝さん	12
team3	たねや･クラブハリエ　自然の恵みから美味しいお菓子を たねやグループ	14
team4	彦根「みんなの食堂」コロナ禍の高齢者や生活保護受給者に弁当配布を開始 NPO法人 芹川の河童 みんなの食堂	16
team5	琵琶湖で学習航海　滋賀県立びわ湖フローティングスクール 滋賀県立びわ湖フローティングスクール	18
team6	農業から始まるSDGs 「共生社会」を目指す滋賀県 滋賀県庁（農政課／食のブランド推進課／子ども･青少年局／企画調整課）	20
team7	木質廃棄物を有効活用しCO2の削減を 山室木材工業株式会社	22
team8	昼TRY部の考える教育と自己理解 NPO法人 D.Live	24
team9	福祉の形　理想を追い求め模索 社会福祉法人 滋賀県社会福祉協議会	26
team10	共生社会への第一歩　滋賀の「農福連携」とは 滋賀県庁（農政課／障害福祉課／企画調整課）	28
team11	SDGsとビジネスをつなぐパイオニア　～しがハブの挑戦～ 滋賀SDGs×イノベーションハブ	30

清水さんはケニアで性感染症の啓発活動も行った

心のままに生きることこそが「性」「コンドマスター」が滋賀にいた

4 質の高い教育をみんなに

QUALITY EDUCATION

清水 美春さん

取材・記事／中村亮太・鈴木汐那

習うより 触って なれようコンドーム

多くの講演会で中高生の視線を集めるのは、滋賀県内で高校の教員をしている清水美春さん。2年間青年海外協力隊でケニアに赴きHIV予防の啓発活動を行っていた経験を活かし、外部講師として多くの学生に「性」を考える場を提供している。実際にコンドームを触ることで生徒たちの当事者意識を駆り立てる。

新型コロナウイルスの感染拡大の影響で、清水さん自身も対面での活動はすべてオンラインに切り替えている。そんな状況の中で「今はまだ関心の無い子にも聞いてもらえる」と講演会の良さを語ってくれた。

そんな清水さんの講演会は決まって「最後はあなたが決めてね」とバトンを渡した形で終わる。この言葉の裏には「自分の人生は自分で決めていい」という強い思いが込められている。「自分の本音を知り、相手に言葉で伝える」清水さんは一貫してコミュニケーションの大切さを語っていた。清水さんの性教育とは「心と身体」の教育である。

性教育のコレからと ココから

現在の日本の教育における性教育の時間は少なく、最低限の知識を教わるだけで終わる「生殖器教育」であるため、性教育＝SEXという印象が拭いきれない。清水さんの講演会には性にオープンな態度とより生徒個人が主体的に学べる環境づくり、知識だけでなく心の大切さと一人ひとり違った考え方を尊重した正解を求めない姿勢と性教育＝SEXという意識を生徒に届ける魅力と力がある。

一人ひとりが自分だけの性の形を作っていき、その大切さを今の若者たちが考え実践し、実感していくことが次の世代にバトンを繋ぐための一歩である。より多くの学校の生徒が清水さんの講演会を聞き、滋賀から全国へ広がってほしい。この考え方が広がることが持続可能な性教育を支える土台を構築する。小さな一歩かもしれないが今後の性教育はさらに発展し続けると私たちは確信している。

「そうなんだ」の 先のアクション

ケニアではコンドームを身近に感じてもらうためにゆるキャラ「コンドマスター」を発案。帰国後は滋賀の教員であることもあり、地元の人に愛される琵琶湖と掛け合わせたオリジナルキャラクターの「びわこんどーむ」を発案。コンドームへのハードルが下がってほしいという思いが込められている。実際に「びわこんどーむ」のコンドームもつくり、イベントで配布している。「大学の生協で売っても面白いよね！」滋賀のご当地コンドームとしてこれからの展開に期待したい。

ビワコオオナマズがモチーフ

清水 美春さん

滋賀県の保健体育の高校教諭。
2010年から2年間ケニアで中高生を中心としたHIVなど性感染症の啓発活動を行う。帰国後、外部講師として学生に、性の正しい知識とコンドームの大切さを伝えている。

取材者

滋賀大学　中村亮太（経済学部1回生）
聖泉大学　鈴木汐那（看護学部2回生）

SHIGA SDGs Studios

幸重さん(下段中央)と一部のスタッフ・ボランティアたち

子どもたちに「居場所」を与える こどもソーシャルワークセンター

1 貧困をなくそう
NO PVERTY

NPO法人 こどもソーシャルワークセンター
取材・記事／中原真愛・吉田葵

目指したのは一人ひとりと向き合うこと

滋賀県大津市にあるこどもソーシャルワークセンターは、様々な事情を抱える子どもたちに居場所を与える活動をしている。この活動は、同センター代表の幸重忠孝さんの「福祉や教育の救済の手からこぼれ落ちてしまう子たちを町の中で救いたい」という思いから始まったものである。

センターでは、子ども一人ひとりと向き合うことを大切にしている。夕食を取りながらアットホームな雰囲気で会話を楽しむ「ｅａｔａｌｋ」や、学校に息苦しさを感じる子が日中を安心して過ごせる場所の「『ほっ』とるーむ」など色々な取り組みがある。

これらの共通点は、大人が子ども一人ひとりにしっかり目を配れる規模で行われているというところである。子ども一人に対して多くの大人が関わる環境で、コミュニケーションに重点を置いた交流を行う。

しつけるのではなく褒めて伸ばす

子どもと接する上で気を付けているのは、しつけようとしないということだそうだ。その代わり、良いことをしたときは思いっきり褒める。些細なことにもそういったリアクションを取ることで、褒められた本人はもちろん、それを見ていた周りの子どもにもいい影響が及ぼされるという。そのような日常を繰り返す中で、子どもたちに変化が見られるようになる。

「例えば、はじめは大人しかった子がちょっとしたわがままを言うようになる。それがとても嬉しいんです」と幸重さんは笑みをこぼす。自然体でいられるようになった証拠だという。他愛もない会話の中で、子どもたちは徐々に心を開き、悩みを話してくれるようになる。

「そうなんだ」の先のアクション

「まずは困っている子どもたちが存在していることを知ってもらいたい」と幸重さんは語る。そして、「こういった活動を他人事として捉えるのではなく、自分も何か行動を起こしてみてほしい」と話した。活動をしている団体のボランティアに参加することや、周りの人にそのような団体があると情報を広めること。私たち学生にもできることはたくさんある。

一人ひとりの小さなアクションが、子どもたちを取り巻く社会をより良い方向へと変えていくのだ。

センターの外観

NPO法人 こどもソーシャルワークセンター 代表　幸重忠孝さん

2012年4月1日、京都市山科区四ノ宮にて幸重社会福祉士事務所を設立。2016年4月に現在の滋賀県大津市観音寺に移転。記事内で紹介した取り組みのほかに、外部の団体ともネットワークを作り様々な活動を行っている。

取材者
立命館大学　中原真愛（薬学部1回生）
滋賀大学　吉田葵（経済学部1回生）

SHIGA SDGs Studios

クラブハリエのバウムクーヘン

たねや・クラブハリエ
自然の恵みから美味しいお菓子を

12 つくる責任 つかう責任

RESPONSIBLE CONSUMPTION, PRODUCTION

たねやグループ

取材・記事／鈴木茂生・山中里奈

自然があってこそのお菓子づくり

滋賀県で絶大な知名度と人気を誇るお菓子メーカーたねやグループ。たねやグループはお菓子づくりを通して滋賀・近江に伝わる伝統を守り、伝え、そして発展させている。内閣府を始めとし、様々なところで評価されている企業活動は近江に伝わる『三方よし（売り手よし・買い手よし・世間よし）』の理念に基づいている。「自然があるからいい素材ができる。また、お菓子のみなもとである素材を大切にすることで、お客様に安全かつ美味しくお菓子を食べていただける。自然があってこそのお菓子づくりなんです」と営業部の水森さんは話す。近江商人の商魂『三方よし』を受け継ぐ企業の姿勢そのものだ。近江の伝統的な風土・精神を守りながら持続的発展を可能にするたねやグループは『12：つくる責任・つかう責任』を含むSDGsの様々なゴールを結果的に実現していると言える。

こうした工夫と努力により、たねやは『三方よし』を実現しているのだ。

懐かしいけど新しいたいまつフェス

近江の風土・伝統の良い例として「ヨシ刈り」がある。ヨシは琵琶湖に生息する植物で、3メートルほどの大きさになり群生する。水を綺麗にする植物であるが、ひとが刈り取りをしなければヨシの原は荒れてしまう。それゆえ、近江では伝統的に「ヨシ刈り」が行われてきた。冬に枯れたヨシは刈り取られ、たねやグループが主催する「たいまつフェス」で多くの個性的なたいまつに姿を変える。12月初旬に行われるこの祭りは風土の保全・文化の伝承を実現しつつ、人のつながりを生み出している。

たいまつフェス

紙ストローは高コスト

たねやグループでは脱プラスチックに向けた取り組みを行っている。紙ストロー1本当たりのコストはプラスチック製ストローの約15本分。環境にいいものを導入するとなるとそれだけのコストがかかる。買い手よし・世間よしだけでは会社は成り立たない。

水森さんは「今の世の中は、気候変動、食品ロス、海洋プラスチック等さまざまな問題を抱えている。私たちが変えていかなければ、私たち、あるいは、その次の世代の人たちが地球に住めなくなってしまう」と語る。

これまで当たり前に提供していたストローをやめ、必要なお客様のみに提供するシステムにする。複数枚入れていたお菓子の説明栞を、QRコード導入により1枚に減らす。こしあんを作る際に無駄になっていた小豆の皮をパウダー状に加工してお菓子の素材とする。

たねやグループ

和菓子・洋菓子の製造販売、喫茶・食事の提供を行っている。滋賀県近江八幡市に本社を構え、関東から近畿、九州までの各地で事業を展開している。

取材者

滋賀大学　鈴木茂生（経済学部4回生）

立命館大学　山中里奈（経済学部1回生）

SHIGA SDGs Studios

食堂で弁当の盛り付けを手分けする地元住民たち

彦根の「みんなの食堂」が、コロナ禍の高齢者や生活保護受給者に弁当配布を開始

3 すべての人に健康と福祉を
GOOD HEALTH AND WELL-BEING

NPO法人 芹川の河童 みんなの食堂
取材・記事／久木絢加・古川太陽

開店1ヶ月で無料の弁当づくりへシフト

彦根市の地域循環型食堂「みんなの食堂」は、4月20日から、市内の高齢者や生活保護受給者を対象に無料で配布するお弁当づくりを始めた。新型コロナウイルスの影響で開店から1ヶ月で閉店の危機に陥り、運営方針を変えたためだ。

みんなの食堂のコーディネーター・川崎敦子さんによると、6月30日までの約2ヶ月間、毎日3食分のお弁当を60人分作ったという。お弁当を作ったのは、コロナ禍で職を失った、料理旅館で働く方や舞台の音響設備の技術者、イベント司会者など地域の方々だ。調理に使う食材は、地域の企業や農家、給食センターから寄付されたもののみを使った。「コロナで小中学校が休校した期間は給食センターから、毎日捌ききれないほど大量の食材が食堂に届いた。食品ロスはもったいない。困っている人のために何か作れないかという思いだった」と川崎さんは語る。

食堂で作ったお弁当は、市の社会福祉協議会や生活保護担当の職員に預けて配布してもらう仕組みだ。

食堂とお弁当づくりを「地域みんなの協力で」両立

「みんなの食堂」はそのシステム上、誰かの参加や支援を原動力に運営されている。卒業論文を書くための大学生や自分の研究を進める大学の研究者など様々な年齢層や職業の人たちが店長となることができるのである。

もちろん店長の役割だけでなく食品支援を行ってくれる人々も存在するため、多様な地域の人々が関わりあって食堂運営やお弁当づくりを両立しているのだ。

川崎さんによると、「最初は支援の対象としていた高齢者の方々や困窮している若者達もいざ支援を開始すると『自分たちだって誰かの役に立ちたい』という考えを持った人々が多数いたために彼らは積極的に支援する立場に移った」という。

「みんなの食堂」の誰でも協力できるという性質こそが地域間での支援の輪を広げる大きなきっかけになるのではないかと思う。

市外や県外にも「地域循環型」の食堂を広げたい！

川崎さんは「『みんなの食堂』を通して地域の人々のつながりを実感した。今後は誰かに焦点をあててあげるのではなく、あくまで食品ロスを0にしていく中ですべての人を横並びと考え、支援されたりしあったりできるような環境を整えたい」と話す。

将来は市・県外にも地域に愛され、人々の拠り所となるような地域循環型の食堂を広げていきたいと考えているという。

食べることと人と関わることを通して心身共に温まれる人が全国に増えることを願う。

食堂の入り口で会話も楽しむ

NPO法人 芹川の河童 みんなの食堂

2020年3月22日、彦根市・花しょうぶ商店街にオープン。地域の誰もが気軽に訪れるような食堂をめざす。食品ロスをなくすことを目標に掲げており、食材はすべて近隣のスーパーや農家さんからの寄付でまかなう。地域の人が日替わりで店長を務めて料理をふるまう。

取材者
滋賀県立大学　久木絢加（人間文化学部2回生）
滋賀大学　古川太陽（経済学部1回生）

SHIGA SDGs Studios

出港する学習船「うみのこ」

琵琶湖で学習航海
滋賀県立びわ湖フローティングスクール

4 質の高い教育をみんなに
QUALITY EDUCATION

滋賀県立びわ湖フローティングスクール
取材・記事／山根崇純・池田怜央

琵琶湖で受け継がれる2つの「関わる力」

滋賀県立びわ湖フローティングスクールでは「環境に主体的に関わる力」と「人と豊かに関わる力」、この2つの「関わる力」を大切にしている。湖上では琵琶湖の自然に直接触れる「びわ湖学習」が行われる。この活動では児童が主体的に環境に関わるきっかけを作っている。

一方、船内生活では大人数での共同生活を通して、共生・協働する力を培っている。児童は船内という特別な環境の中で、人と豊かに関わる力を育む。

活動開始から約40年間、57万人以上の児童が乗船してきた。フローティングスクール指導主事の寺西さんは「一人ひとりが自分のできることを考えて実践してきた成果が今の琵琶湖だと思う。SDGsを踏まえつつ、より良い取り組みを目指したい」と力強く語った。

船で学ぶ 琵琶湖に学ぶ

県立びわ湖フローティングスクールでは学習船「うみのこ」での学習を通して、琵琶湖の環境に主体的に関わる力を育むことを目的にしている。以前は淀川水域の学校を中心に交流が始まり、現在では、「うみのこ」には滋賀県のすべての5年生が乗船している。乗船中の学習では環境問題のほか、人と豊かに関わる力も身につけることができる。いろいろな学校の生徒との交流の中で、友情を育む機会にもなるのだ。また、学習環境である「うみのこ」にはバイオ燃料（BDF）や太陽光パネルが搭載され、電気推進船として環境にも配慮している。滋賀県をはじめ、全国・世界の子どもたちが、この「うみのこ」に乗船し琵琶湖から様々な学びをしてほしい。

新しい学習の形 1日航海

新型コロナウイルスの影響を受け、これまでの1泊2日の航海から、今年度は1日航海として実施している。船内の対策では、はめ込み式の窓から開閉式の窓に改造するなど換気の強化に成功した。1つの部屋に大人数集まることを避けるなど、濃厚接触にならないように注意して子供たちの動きを工夫し活動を続ける。これまでの航海に比べ、1日航海では学習時間・乗船校同士の交流時間が減少するが、今年度最初の9月1日の航海では、子どもたちから「楽しみにしてた」など好評の声が多数あったという。子供たちの交流は少ないが、プランクトンや魚、湖底生物の観察を通し、学習を進めていくという。

2代目「うみのこ」

滋賀県立びわ湖フローティングスクール

学校教育に加え学習船「うみのこ」での学習を通して、健全な青少年の育成のため設立された。滋賀県内外の児童を対象に環境教育を行っている。

WEB：
https://uminoko.jp/

取材者
立命館大学　山根崇純（経営学部4回生）
滋賀大学　池田怜央（データサイエンス学部1回生）

SHIGA SDGs Studios

環境への負荷が少ない米栽培の様子

農業から始まるSDGs「共生社会」を目指す滋賀県

LIFE ON LAND

滋賀県庁（農政課／食のブランド推進課／子ども・青少年局／企画調整課）
取材・記事／石神央稀・山田洋介

農福連携で障害を持つ人が活躍できる社会を目指す

「農業を1つのツールとして『共生社会』を目指す」滋賀県農政課の橋本さんはこう話す。農福連携は地域の中で行うからこそ重要であり、滋賀県では様々な人が農業というツールを通じて繋がる社会「共生社会」を目指している。農福連携の形態は都市部と農村地域で異なる。都市部では障害を持つ人が地域の食材を使ったレストランで働くといった活動、農村地域では農作業をするといった活動が行われている。障害を持つ人が農業者の作業を手伝い働くために作業を細分化することが重要である。

現在、農業従事者と福祉事務所がマッチングを行って農福連携を行っている。滋賀県では、農作業を細分化してどのような作業がどこまでできるかを調査している最中だ。

滋賀県の農福連携は農業分野と幅広い福祉分野を繋ぎ、誰もがいきいきと地域で暮らし、共に働く共生社会づくりを進める内容となっている。今後の発展に注目したい。

日本一の環境こだわり農業からSDGsへ

環境こだわり農業は化学肥料や農薬の使用量が通常の半分以下で環境にやさしい農法だ。平成13年から取組がスタートし、今年で19年目になる。滋賀県は農地面積に占める「環境こだわり農業」の割合が日本一である。しかしその知名度はまだまだ低いのが現状だ。

県の食のブランド推進課の今井さんに話を聞くと「環境こだわり農産物を知っているか」というアンケートに対して知っていると答えた人が45・7％と約半数の人にしか知られていないことがわかった。また滋賀県では各種イベントや食の展示会、近江米のCMなどを通じて、環境こだわり農業を県内・県外のなるべく多くの人に知ってもらうための取組を行っている。今井さんは「環境と調和のとれた農業生産を行う環境こだわり農業はSDGs時代にふさわしい農業」と話す。多くの人が環境こだわり農業を知ればSDGsについて考える人も増えるだろう。まずはスーパーで買い物をするときはなるべく環境こだわり農産物を買うようにする。それがSDGsの第一歩につながるだろう。

人が繋がる地域創りを「子ども食堂」から

子ども食堂の取り組みを知っているだろうか。子ども食堂は子どもを真ん中においた地域づくりの一環として取り組まれている活動だ。「地域の子ども食堂の活動に様々な背景を持つ方々に参加してほしい」と子ども・青少年局の村上さんは語る。子ども食堂では食事の提供だけでなく、食育や読み聞かせなど、地域の特色を活かした取り組みが行われている。例えば農業体験などを通して人・環境・食と向き合う。子ども食堂はSDGsの様々な目標に広く関わるのである。

出典：滋賀県社会福祉協議会

滋賀県庁の皆様

農業と福祉というテーマの下、滋賀県庁の様々な部署から取材に応じて頂きました。

- 農政課　橋本様
- 食のブランド推進課　今井様
- 子ども・青少年局　村上様
- 企画調整課　橋本様

取材者
龍谷大学　石神央稀（農学部2回生）
滋賀大学　山田洋介（教育学部1回生）

SHIGA SDGs Studios

国内最大級の生産量を誇る木材パレット

木質廃棄物を有効活用し CO2の削減を

TACKLING CLIMATE CHANGE

山室木材工業株式会社
取材・記事／張 龍也・中田 峻輔

木材パレットから生まれた新たなリサイクル方式

山室木材工業は米原市に本社をおく、木材パレットの製造・販売を行う企業だ。パレットを売ることがメインだった木材会社だが、今では木質廃棄物のリサイクル事業に取り組んでいる。そのきっかけは、お客様から「使い古したパレットを引き取ってもらえないか」という要望からであった。主に木質チップを再生し、様々な形の木材廃棄物を受け入れ、自社開発による大型リサイクルラインで、高品質な木製チップを生産・出荷している。

山室木材工業は発電、エネルギー事業にも積極的だ。廃棄に困った木材パレットから木材チップへとリサイクルするとともに、それらのチップを有効活用するためにバイオマス発電も行っている。木材チップを燃料として利用し、発生した蒸気でタービンを回して発電する。

また、バイオマス発電以外にも、滋賀県からの公募をきっかけに、湖北を流れる姉川にあるダムを使って、水力発電の事業も2017年に始めた。

木材温室ハウスでマンゴー栽培

発電だけではなく、自社の裏にある農園でマンゴー栽培もしている。マンゴーといえば、暖かい南国のフルーツというイメージがあるが、バイオマス発電で得たエネルギーを使って、木材を利用した木造温室で栽培している。寒い滋賀県湖北ではあるが、温室で栽培しているため、品質も南国のものと比べて劣らない。マンゴーに目をつけたきっかけは、現グループ代表がブラジルに留学に行き、そこで目にした多くのマンゴーに魅せられたことだという。マンゴーの他にも、いちごやニンニクも栽培している。栽培だけでなく同社では、カフェも経営している。長浜市にあるSweets&Café Dragée（ドラジェ）だ。農園で栽培したマンゴーやいちごを使ってケーキなどを中心に販売している。今後は百貨店などでの販売も目指しているそうだ。

木材温室ハウス

多種多様な取り組みに挑戦

発電・エネルギー事業に加えてマンゴー栽培、さらにはカフェ経営まで、多種多様な取り組みに挑戦している山室木材工業。今後はどんな事業を展開するのだろうか。木材会社という枠組みを超える、今後の事業展開にも期待だ。

山室木材工業株式会社

山室木材工業株式会社は、滋賀県米原市に本社をおく、主に木材パレットの製造・販売を行う企業だ。
『お客様の声にスピードとスマイルで対応し、自然と産業の共存を目指す』という理念のもと、自然と産業の共存を目指す。

山室木材工業株式会社 Pallet & Recycle

取材者
滋賀大学　張龍也（データサイエンス学部1回生）
立命館大学　中田 峻輔（法学部3回生）

SHIGA SDGs Studios

ボードゲームの様子。自然と会話が生まれる

昼TRY部の考える教育と自己理解

4 質の高い教育をみんなに

QUALITY EDUCATION

NPO法人 D.Live
取材・記事／寺川慧・真鍋安夕

それぞれの選択

NPO法人D・L・iveは子どもと、子どもに関わる大人を対象に様々な活動を行なっている。今回取材した昼TRY部は、県内にあるフリースクールのひとつで、小学5年生から高校3年生の不登校の子どもたちを対象としている。働いているのは元教員や大学生だ。

フリースクールと聞くと、学校のように勉強をしているとイメージする人が多いかもしれない。しかし、ここでは子どもたちは自由に過ごしている。ソファーに寝転がったりゲームをしたり、もちろん勉強をしたい子は勉強をするし、教材が欲しいといえばアドバイスをすることもあるという。昼TRY部では、子どもたち自身が自分の持っている力を知り、その上で自身が社会で生きていく力を育んでいる。

「質の高い教育」とは

SDGsの4つめの目標として挙げられているのが「質の高い教育をみんなに」という目標だ。確かに日本国憲法26条では社会権の1つとして「教育を受ける権利」が保障されている。

しかし昼TRY部で多くの子供たちと接し未来へ送り出してきた田中さんは「今の社会ではマイノリティーの子どもたちにとって学ぶ機会が足りていない。質の高い教育とは、子どもたち自身が学びたいことを学ぶ機会があること、そして選択する自由があることだ」と話す。

コロナ禍により生み出されるICT教育環境の差に端を発するような学びを受ける場所だけではなく、様々な理由で学校に通うことができない子供たちの学びへの選択肢が狭められることこそが教育の格差を広幅化させる要因なのだ。

現在滋賀県では、フリースクールに対する社会的支援はほぼ無いという。子どもたちの学ぶ機会を拡充させ心の環境を整え、未来への希望を繋ぐことが我々の使命なのではないだろうか。

今持っている武器で戦う「生きる力強さ」

自分の才能って何だろう。自分に出来ないことって何だろう。そんな事を考えたことはあるだろうか。世界の論理では人間は外向型・内向型の2タイプに選別され、社会に適合するか否か「良し悪し」がしばしば議題に挙がる。だがその「良い悪い」とは、誰にとっての「良い悪い」なのだろう。社会にとってなのか、それとも大多数にとってなのか。田中さんは「誰かを見て落ち込んだり自分を責めたりするのは、自己についての理解が足りていないから。自分が出来ないことと出来ることを正確に知れば、今自分の持っているものが全て、あなた自身の才能であることに気づく事ができるだろう」と話す。その人らしく生きること、頑張らないこと。それこそが社会で生きていく上での「生きる力」なのかもしれない。

テレビゲームをする子どもたち

NPO法人 D.Live

NPO法人 D.Liveでは昼TRY部を始め、tudotokuやおとなTRY部など、「子ども」と「子どもに関わる大人」を対象に様々な活動をしています。今回はその中でも昼TRY部の活動を取材しました。

取材者
聖泉大学　寺川慧（看護学部2回生）
滋賀大学　真鍋安夕（教育学部1回生）

SHIGA SDGs Studios

“ごはん”を通じて見守り育てる子ども食堂

福祉の形　理想を追い求め模索

3 すべての人に健康と福祉を

GOOD HEALTH AND WEEL-BEING

社会福祉法人 滋賀県社会福祉協議会

取材・記事／原園秋久・河本剛

県社協が取り組む 子どもの笑顔 はぐくみプロジェクト

あなたは滋賀県の福祉についてどれくらい知っているだろうか。私たちは滋賀県の福祉を推進する県社協に取材を行った。「よくわからない」と思われがちな福祉について、より多くの人が知り、福祉について今一度考えるべきだと感じた。

県社協では「子どもの笑顔はぐくみプロジェクト」という取り組みを行っている。このプロジェクトでは、子ども食堂、生きづらさを抱える子ども達を支えるフリースペース、児童養護施設で暮らす子ども達への仕事体験や企業との交流の場の提供の3つの事業を展開しており、それぞれが福祉に関する様々なニーズに合わせて活動している。

その中の1つである子ども食堂は“ごはん”を通じて地域ぐるみで子どもを見守り育てていく活動だ。このような取り組みを通して、子どもの「居場所づくり」に力を入れている。これらが目指すのは、世代の垣根を越えて皆が気軽に利用できるような居場所である。福祉という言葉は、専門家でさえ説明に困ってしまうほど意味の広い概念だ。その福祉の在り方の一つに、このプロジェクトのような形もあるのではないだろうか。

福祉に隠れる 葛藤と二面性

「一般的に福祉の対象とされる方は、果たして支援されたいと思ってやってくるだろうか」。県社協の遠城さんが何気なく放った言葉だった。「居場所づくり」に力を入れているこのプロジェクトであるが、子ども食堂のように誰でも気軽に足を運ぶことができる場所にすることによって本当に支援の必要な人が参加しやすくなることもあるという。つまり、敢えてターゲットを絞らないことがその要支援者にとって参加しやすい環境になることもあるということだ。また、様々な理由によって保護者等からの適切な保護を受けられない人に向けた支援活動も存在する。このような場合、本人が社会性や心理面に問題を抱えている場合が多い。そのため、本人の立場を考慮し守秘義務を重視すべき可能性もある。一概に福祉について広くたくさんの人に知ってもらうことや垣根のない利便性ばかりを求めることが、正しいとは言えない。福祉にはこのような二面性がありその事業に携わる関係者は、この葛藤に日々思考を巡らせているのである。

若い世代へ求める「正しい理解」と「共感」

福祉を見つめる立場にはさまざまな視点がある。福祉を生業に生活する人、ボランティアに参加する学生、福祉と全く接点のない若者、それぞれに違った福祉の考え方がある。若い人の世の中を良くしたいという気持ちや態度が、被支援者にとって良い影響を与える場合もある。このような取り組みに対する「共感」や「興味」が、自分自身の動機づけになるのである。

「教科書を通して頭で理解するだけではなく、実際に興味を持った分野を体験してみてほしい」と皆が口をそろえて主張した。その上で、福祉に対する「正しい理解」をしてほしいと語った。

フリースペースでは暖かな居場所づくりを目指す

社会福祉法人 滋賀県社会福祉協議会

滋賀県社会福祉協議会では、だれもが「おめでとう」と誕生を祝福され、「ありがとう」と看取られる人間的共感に根ざした共生社会地域福祉を目指しています。県社協はその実現のため、不断の地域福祉実践を行います。

取材者

びわこ学院大学
原園秋久（教育福祉学部1回生）
滋賀大学大学院
河本剛（データサイエンス研究科1回生）

SHIGA SDGs Studiosの活動に参加し、2人とも教育と福祉に興味を持つ。「伝えたい思いや考えを発信したい」と、今回の取材内容を選択した。

SHIGA SDGs Studios

農業をメインにした福祉作業所「おもや（栗東市）」での野菜の種まきの様子

共生社会への第一歩
滋賀の「農福連携」とは

10 人や国の不平等をなくそう
REDUCED INEQUALITIES

滋賀県庁（農政課／障害福祉課／企画調整課）
取材・記事／進藤穂佳

共生社会実現のため部局横断で取り組む

国では、農福連携は障害者等が農業分野で活躍することを通じ、自信や生きがいを持ち社会参画を実現する取組としている。農福連携の主な取組として、農業者と福祉事業所等の間で行われる「農作業受委託」があり、農家の収益や効率向上、障害者の工賃や体力の向上に繋がる事例もある。

一方、滋賀県では、障害福祉分野だけでなく「医療・介護分野」や「地域の子どもたち」、「教育分野」も含めた「新たな農福連携」を推進している。子ども食堂を農福に位置づけているのは全国的にも珍しい。滋賀県の農福連携は、県庁が部局横断的に推進しているのだ。

農業を1つの「ツール」として、共に暮らし、働き、誰もが活躍できる、そういった社会がつくれたら良いという思いで、滋賀県は農福連携推進事業に取り組んでいる。

農福連携の推進に必要なのは情報の共有

現在、滋賀県内でも農業者と福祉事業所等の間では、農作業受委託という形での農福連携に取り組まれている。しかし、農業者は福祉作業所等にどの程度の農作業なら頼めるのか、また福祉作業所は農業のどの程度の農作業なら実施できるのか、実はお互いあまり知らないのが現状である。

例えば農作業の工程が1～5番目まであるとき、作業分解を行い、3番目と5番目の工程なら障害のある方でも出来るということが農業者と福祉作業所等で共有されていれば、農福連携がよりスムーズに進むことが期待できる。今年度はこの仕組みづくりのための調査が行われている。

また、滋賀県では、障害福祉サービス事業所が農業の専門的な技術支援や助言を必要とした際に、農業技術アドバイザーを派遣する事業がある。無料で利用でき、農業に取り組むハードルを下げる仕組みの1つである。

「農福連携で誰もが暮らしやすい社会を目指す」

「健常者にも得手不得手があるように『障害』という括りではなく障害者個人の『個性』として見れば、地域の中で活躍できる場所をさらに見つけることができるはず」と県農政課の橋本さんは話す。

もともと農業は1人で行うものではなく助け合って行うという要素の強い分野だと考える。だからこそ農業と福祉の連携が共生社会の実現のきっかけになるのではないだろうか。

子ども食堂の様子（出典：滋賀県社会福祉協議会）

滋賀県庁の皆様

農業と福祉というテーマの下、滋賀県庁の様々な部署から取材に応じて頂きました。
農政課：橋本理史さん（左）
障害福祉課：今西真由さん（右）
企画調整課の橋本明郎さんにもご協力いただきました。

取材者
滋賀大学　進藤穂佳（経済学部1回生）

健常者も障害者も、自分らしく生きることができる社会になってほしいと強く思います。この記事を読んで少しでも農福連携に興味を持つ人が増えたら嬉しいです。

SHIGA SDGs Studios

2020年9月9日の「しがハブセミナー」

SDGsとビジネスをつなぐパイオニア ～しがハブの挑戦～

9 産業と技術革新の基盤をつくろう

INDUSTRY, INNOVATION AND INFRASTRUCTURE

滋賀SDGs×イノベーションハブ
取材・記事／中山剛志・真野晃匡・岡本七海

SDGsと企業を結ぶ拠点「しがハブ」

滋賀SDGs×イノベーションハブ（愛称：しがハブ）は滋賀県内の企業と共に、SDGsの達成を目指した新たなビジネスを生み出している。「なぜ今SDGsなのか？」という疑問を持つ企業に、SDGsに取り組むメリット・取り組まないリスクを説明し、一緒にSDGsの達成を目指す。

企業が新たなビジネスを創出する上で、しがハブがキーワードとするのが「アウトサイド・イン」のアプローチである。すなわち、インサイドにある技術や資本を基に新たなビジネスを考えるのではなく、アウトサイドにある社会的な課題を基に、企業の強みを生かしたビジネスで解決するのだ。

時には企業の深くまで入り込み綿密にコミュニケーションを行うこともある。企業と協力して活動を行うには、その企業としっかり向き合うことが大切だ。

しがハブと生み出す新たなビジネスの芽

しがハブは、約2年間の活動で30以上のSDGsビジネスに携わった。SDGs達成のサポートを行い、新しいビジネスの土台作りに繋げている。

「朝恋トマト」を生産している近江八幡市の浅小井農園株式会社では、家庭で出た廃食油を回収しバイオディーゼル燃料としてハウスの暖房設備に再利用するシステムを構築した。環境に優しいだけでなく重油よりも少ないコストで利用でき、また、地域住民とのコミュニティを形成し、ブランドの周知を行うことが狙いだ。

SDGs宣言をした株式会社京都工芸「タオルはまかせたろ」では、使い終わったタオルを回収して土嚢を作ったり、タオルを作るときに出てしまう糸の集まり（耳）を使って宅配をする時の緩衝材にするなど一手間をかけることで様々な課題を解決し、持続可能な社会にするための取り組みを行った。今後しがハブを通じてさらに新プロジェクトの展開を検討している。

SDGsに根差したライフスタイルを送るには

取材に応じたしがハブの國友さんは「企業だけでなく学生にも自分の生活の中でSDGsを意識してほしい」と話す。SDGsは世界的なスケールの大きい目標であり、個人の力ではどうにもならないと考えがちだ。だからこそ、自分のライフスタイルの範囲に合わせて「自分ごと」として捉える努力をすべきではないだろうか。

企業の他にNPOや学生をどれだけ巻き込めるかが、しがハブの次の鍵となる。私たちもSDGs達成に向けて、一人ひとりがSDGsの取り組みに積極的な姿勢を見せることが必要だ。

Zoomでのオンライン取材の様子
右下がしがハブ・國友さん

滋賀SDGs×イノベーションハブ

愛称「しがハブ」。2018年10月、滋賀県と経済界が協力し、官民連携の組織として創設。県内の社会的課題の解決につながるイノベーション創出を目指す。

WEB：
https://s-sdgs-ih.jp/

取材者
滋賀大学　中山剛志（経済学部2回生）
滋賀大学　真野晃匡（経済学部3回生）
立命館大学　岡本七海（薬学部1回生）

学年・所属がそれぞれ異なる中、SHIGA SDGs Studioプログラムを通して交流。コロナ禍において、一度も会わずに取材・記事作成を行った。

SHIGA SDGs Studios

滋賀県　環びわ湖・大学SDGsマップ2020

滋賀のシンボル・琵琶湖をとりまくように立地する14の大学のキャンパス。心を癒やす水辺、緑濃い山々のなかで、いきいきとしたキャンパスライフを学生たちが送っています。環びわ湖大学・地域コンソーシアムに加盟する大学のSDGsの取り組みやイベントについて、マップでご紹介します。

びわこ成蹊スポーツ大学　（授業）スタディースキルⅠ・Ⅱ

2020年前期・後期実施 ／ 学務部教務課

1年次生必修科目「スタディースキルⅠ・Ⅱ」の授業において、社会的接点の拡充とし、社会問題やSDGsを通して知見を広げ、考えることを目的とし、SDGsの概要を学びます。その後、「SDGsとスポーツ」をテーマとして受講生同士の意見交換を行い、各自レポートをまとめ、発表を行います。

龍谷大学

農学部｜養蜂管理上の難題である寄生ダニの早期検出技術の開発

龍谷大学農学部教務課

養蜂管理において使用する農薬量を低減する畜産管理方法の確立を目指します。環境負荷を下げる効果があり、薬剤耐性ダニなどの発生を抑制できることから、SDGsの「12：つくる責任、つかう責任」の達成につながります。養蜂管理を簡易にする技術開発ができれば、ミツバチを介した送粉システムを利用する生態系サービスにも寄与でき、「15：陸の豊かさも守ろう」の達成に大きく貢献します。

農学部｜「姉川クラゲ」栽培法の確立

龍谷大学農学部教務課

陸棲藍藻類の一種イシクラゲは、かつて滋賀県の姉川流域で食用とされ「姉川クラゲ」と呼ばれていました。この食文化を復活させるために、「姉川クラゲ」の栽培法を確立し、衛生的な「姉川クラゲ」を安定して生産・供給することを目的として活動しています。主に、多賀町栗栖地区の環境に注目し、地元の方々の協力を得て、多賀町栗栖地区の耕作放棄地で試験栽培を実施しています。

公式サイト▼
https://bit.ly/2H2bsdB

滋賀医科大学　リレー・フォー・ライフ・ジャパン 滋賀医科大学

2020
10.10～10.11
@滋賀医科大学

滋賀医科大学学生課・（公財）日本対がん協会

がん患者さんを支援し、地域のがん征圧を目指すチャリティーイベントです。年間を通し、がん啓発活動や募金活動を行い、年に1度・24時間のリレーウォークを開催します。2人に1人ががんになる時代、学生が情報発信していくことで、「誰にとってもがんは他人事ではない」ということを意識していただけたらと願い、活動しています。

公式サイト▼
https://relayforlife.jp/shigaidai/

立命館大学　Sustainable Week 2020

2020
10.5～10.10
オンライン開催

立命館大学Sustainable Week実行委員会

日本初・学生主催のSDGs体験型イベントとしてスタートしたSustainable Week。SDGsに基づいて、立命館大学びわこ・くさつキャンパスを1万人の"小さな地球"と見立て、それぞれの学生団体の活動内容や専門性を活かしてSDGsの17のゴールに関連した企画を開催しています。

公式サイト▼
bit.ly/3ctBXV3

びわこ学院大学　SDGs啓発ポスターの作成

2020年9月～2021年3月｜びわこ学院大学学生支援課

社会福祉援助技術演習Ⅱの中で、数グループに分かれてそれぞれSDGs啓発ポスターを作成します。ソーシャルワークの価値や知識に基づいてミクロ、メゾ、マクロのレベルで人と環境の間でおこっている問題への介入スキルを身に着けることを目指します。そこで、講義時間の一部を使用し、SDGs啓発ポスター作りを通して、社会変革について取り組みながら学びます。作成したポスターは学内に掲示します。

大学名　環びわ湖大学・地域コンソーシアム 加盟校
県市町　環びわ湖大学・地域コンソーシアム 加盟自治体

一般社団法人
環びわ湖大学・地域コンソーシアム
https://www.kanbiwa.jp

長浜バイオ大学　市民土曜講座

2020年10月～2021年2月の土曜日（月1回）
地域連携・産官学連携推進室

びわ湖東北部地域連携協議会事業として、地域住民に向け年間5回程度長浜バイオ大学の特色を活かした様々な講座を開講しています。参加費無料、事前登録不要で誰もが気軽に参加できる講座を目指しています。また2020年度からは動画公開も予定しています。

滋賀文教短期大学　ぶんぶんひろば

年8回程度実施｜長浜市　*2020年度は中止
滋賀文教短期大学 子ども学科

地域にお住まいの乳幼児とその保護者を対象に、「ぶんぶんひろば」を開催しています。学生が考えた遊びや催し等をとおして、地域の子どもたちとふれあいます。保護者への子育て支援活動、地域貢献の場、そして学生の実践的な学びを深める場として、年8回程度開催しています。

公式サイト▼
bit.ly/3iKVMcE

聖泉大学　安心安全なまちづくり（防災サポーター）

地域連携交流センター

2017年11月に聖泉大学防災サポーターを結成し、彦根市の防災訓練・避難場所訓練や火災予防啓発活動、救急フェア等で活動しています。またキャンパスで「防災のつどい」の開催、小学生の防災キャンプのサポートを行う等、安心安全なまちづくりを目指して活動を継続しています。2019年度からは、彦根市消防団・機能別消防団員（大学生団員）として、彦根市消防本部と共に活動をしています。

公式サイト▼
bit.ly/33BWST7

滋賀大学

滋賀大学サステナウィーク

昨年11月実施｜彦根キャンパス　*2020年度実施未定
滋賀大学地域連携教育推進室

2019年に初開催したサステナウィークは、様々なモノやコトについて「〇〇の持続可能性」を考える機会を提供するイベントです。学内においてはキャンパスSDGsに取り組む人を増やし、学外においても持続可能性に関わる取り組みを展開する積極的な地域人材を抱卵（インキュベーション）することを目的に開催しています。

公式サイト▼
bit.ly/3cgNLd9

学生自主企画プロジェクト

彦根キャンパス・大津キャンパス　*2020年度は中止
滋賀大学学生支援課

学生自主企画プロジェクトは、SDGsの促進を目指すプロジェクトで、学生の独創的・意欲的な活動を通して企画力・行動力・実践力等を培います。教育交流活動、研究活動、地域貢献活動、ボランティア活動、キャンパス改善活動など、様々なSDGsに関わる取り組みを行っています。

プロジェクトの一例

滋賀県立大学

キャンパスSDGsびわ湖大会

地域連携・研究支援課／地域共生センター

県内外でSDGsに取り組んでいる人たちが一堂に会し、それぞれの活動について報告し、意見や情報を交換する交流イベントです。今年度のイベントテーマは"「子ども・若者」と「大人」がともに歩むSDGsへの10年"。オンライン開催の予定です。

2020.11.21
オンライン開催

スチューデントファーム「近江楽座」

通年実施｜県内外の地域（海外含む）／地域連携・研究支援課

「近江楽座」は地域貢献を目的とする学生主体のプロジェクトを大学が支援する教育プログラムです。毎年、学生主体の地域活動を募集し、所定の審査を経て、20プロジェクト前後が採択されます。学生が地域の課題に地域の方々と一緒に取り組み、その解決を目指しています。

公式サイト▼
bit.ly/36bM8wx

びわ湖東北部地域連携協議会

びわ湖東北部地域の大学・短大・自治体・経済産業界等が、SDGsを活用し、力を合わせて地域の課題解決や魅力と活気ある地域社会の創出を目指したプラットフォーム。「産業振興に向けた産官学連携」「地域コミュニティの活性化」「地域を担う次世代人材育成」の3つのワーキンググループを形成し、産官学協働で事業を推進しています。

www.hn-rcc.jp/

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS

SHIGA SDGs Studiosの受講お疲れ様でした。

抽象的なSDGsを自分ごととして捉えて、無事に全てのチームが記事にできたことを大変嬉しく思います。新型コロナウイルスの影響で、プログラムが全てオンラインで実施となり、直接一度も出会うことなく1つの記事を書き上げたことは人生でそうない経験だと思います。コロナ収束後にぜひ一緒に記事を書いたペアと仲良く振り返って欲しいと思います。

滋賀県は2017年にSDGsの取り組みを始めてから3年が経ちました。SDGsの達成には、イノベーションによる新しい社会変革が必要です。新型コロナウイルス感染症の拡大に伴う「Stay Home」による私たちの行動変容もイノベーションの1つです。今回受講された若い世代の皆さんが10年後のSDGs達成後の社会のタネを見つけてくれると信じています。

また、今回のSHIGA SDGs Studiosに限らず、自分にとって、身近な人にとって、社会にとって持続可能な社会を思い描いて、実現に向けて一歩ずつチャレンジをして欲しいです。これからの皆様の活躍を期待しています。

SDGs レクチャー講師
上田 隼也
一般社団法人
SDGs Impact Laboratory
代表理事

SHIGA SDGs Studios Booklet 2020
大学生が見つけた滋賀のSDGs

2020年11月　発行

発行所　一般社団法人 環びわ湖大学・地域コンソーシアム
滋賀県大津市末広町1番1号日本生命ビル4階
発行者　事務局長　大菅 進
編　集　吉武 莞（一般社団法人SDGs Impact Laboratory）
中西 優奈（一般社団法人SDGs Impact Laboratory）

©Copyright 2020 一般社団法人 環びわ湖大学・地域コンソーシアム / SDGs Impact Laboratory

本誌に掲載されている記事の無断転載を禁じます。すべての著作権は、記事執筆者またはその情報提供者に属します。本誌の無断複写・複製は、著作権法上の例外を除き禁止です。

かんびわ　検索
https://www.kanbiwa.jp/

Message

今回のプログラムで講師を努めていただいた皆様と
滋賀県知事よりメッセージを頂きました

このたび、一般社団法人環びわ湖大学・地域コンソーシアムにおかれましては、県内の大学生が一体的にSDGsの視点で滋賀の魅力を発見・発信する事業を実施いただき、感謝申し上げます。

今年度は、新型コロナウイルス感染症の影響によりキャンパスの在り方が大きく変わり、学生のみなさんの活動も制限される中、オンラインでSDGsの達成につながる取組を取材し、記事を作成され、オンラインのイベントで発信するという挑戦的な取組が行われました。みなさんの行動力とそこから得られた気づき、発見は、示唆に富んだものが多く、大変心強く思います。

滋賀県には、琵琶湖を真ん中に環境を大切にする考え方や、三方よしの精神、福祉の思想と実践などが受け継がれています。2030年に向けて、行動の10年として、様々な分野でSDGsの取組が進む中で、次世代を担う若者の参画と行動は重要です。学生のみなさんが地域に関わることで、地域が元気になり、共感の輪が広がり、新たな連携を生み出すきっかけとなることを期待しています。

SDGsは、世界に対する窓、未来に対する責任です。将来世代も含め、誰もが幸せを感じることのできる「未来へと幸せが続く滋賀」を目指し、ともにSDGsを実践していきましょう。

三日月 大造
滋賀県知事

取材（インプット）や記事（アウトプット）の挑戦、いかがでしたか。

みなさんの作品から、しっかりと「熱」が伝わってきました。それが、講師としてはとてもうれしかった。みなさんの文章を読んで、誰かが共感し、誰かが行動するかも知れない。その源は、みなさんの中にある「熱」です。インプット作業で積み重ねた「熱」を、効果的にアウトプットする。その繰り返しが、少しずつ社会を変えていきます。

今回、思うようにいかなかったことや失敗も多かったと思います。新聞記者の立場から言うと「そんなこと、当たり前」です。しかも、あなたは挑戦を始めたばかり。失敗を重ねるごとに、悩むごとに、あなたの情熱やスキルは成長していきます。あなたの問題意識も、確実に変化していきます。

そして、仲間でやりましょう。楽しくやりましょう。どんどん「つながる」ことで、思わぬ知恵とパワーが生まれる。今回のプログラムは「オンラインでもこれだけつながることができる」と、私も大発見でした。「分断」や「格差」が強まる世の中で、「つながる」ことの大切さを痛感しています。あなた自身のためにも、この社会のためにも、挑戦を続けてください。

記事・取材
レクチャー講師
外園 周二
（株）朝日新聞社
大阪本社代表室主査

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS

環びわコンソーシアムは 持続可能な開発目標（SDGs）を支援しています